論文要旨

和歌の機能とその変容―哀傷歌を基軸として―

吉井　祥

本研究は、人の死に関わって詠まれる和歌、哀傷歌を対象に、平安時代の実社会において、和歌がどのような働きをしていたのか、和歌の機能とその変容を明らかにすることで、平安和歌史を叙述しようとするものである。

上代の挽歌研究の大量な蓄積に比して、平安時代の哀傷歌の研究はあまり顧みられてこなかった。ささやかに勅撰集哀傷部の構造や配列を通した作品論や、哀傷歌を通して歌人の実人生や性格を論ずる歌人論がある程度である。哀傷歌とは何か研究するものは管見の限り無い。また、本研究が行おうとする和歌の機能の研究も、新しい研究ジャンルである。哀傷歌は、いつ、どこで、誰が、何のために詠んだのか、詠歌状況を他ジャンルの和歌より把握しやすく、実証的研究に向いており、様々な詠歌形式が現存しているため、実社会における和歌の機能を研究する対象として適している。

本論第一部「平安前期までの哀傷歌史」では、平安前期までに人の死に関する文芸、特に和歌がどのような史的展開を辿ったのかを論じた。第一章「挽歌から哀傷歌へ―上代挽歌史整理―」では、上代の挽歌の歴史を概観することで、人の死に関する和歌の詠歌史が平安の哀傷歌へ繋がるものかどうか確認した。挽歌は、喪葬儀礼に関わる公的儀礼挽歌と、儀礼に関わらない私的挽歌が併存する形で展開した。公

的儀礼挽歌は万葉第二期を盛期として、それ以降衰微することは諸研究の述べるところであるが、私的挽歌の詠歌の様相も平安の哀傷歌へ繋がる徴候を示すものではないことを指摘した。第二章「哀傷の漢詩の史的展開」では、平安初期の勅撰漢詩集における哀傷の漢詩が、公的な関係性において作成され、内容も公的な哀傷を示すのに対し、『古今集』前夜の文人たちの哀傷の漢詩には、私的関係性での漢詩が見え、内容も私的な哀傷を表現していることを確認した。これら二章を受けて、第三章「平安前期における哀傷歌の展開」では、人の死に関する和歌が、平安前期において、どのような展開を辿ったのかを明らかにした。作者と死者の関係性を視点とするならば、平安前期の哀傷歌は、公的な関係性に基づくものから詠歌され始めるが、『古今集』撰者時代頃から私的な関係性に基づくものへと広がりを見せる。詠歌形式は、独詠歌から贈答歌へという流れを辿る。平安の哀傷歌というと、近しい者の死を歌で弔問し合うといったイメージが強かったが、そこに至るまでの和歌史を実証的に描き出した。

これら第一部を通して、文芸が公から私へ広がり、展開していく様を見出すことができた。

第二部「哀傷歌を基軸とした和歌史」では、第一部を基盤に主に哀傷歌を対象に、和歌の機能とその変容を辿ることで和歌史を構築することを試みた。第一章では、歌体に着目し、長歌作品の多い挽歌に対し、平安期の哀傷歌に長歌が極めて稀であることについて、なぜそのようになったのか、現存する稀な実例である伊勢の作例を通して検証

した。そこから見えてくるのは、哀傷歌の詠歌がその場にいる人々の哀傷の代弁による共有から、個々に詠み合う形による哀傷の共有へと変容していく様である。以下の章ではこの「詠み合い」について考察を深めた。第二章、第三章では「贈答」という詠歌形式に着目し、その機能を論じた。第二章ではまず遺族に歌を贈る弔問歌とその返歌を取り上げることで、贈答を交わす者同士が対面か非対面かで、歌の表現と機能が異なるということを明らかにした。第三章では第二章の成果をより普遍化するため、対象を大きく広げて、哀傷の贈答歌全体で場によって機能がどのように異なるのか論じた上で、弔問に限らず、哀傷の贈答歌全体において、非対面と対面で和歌の機能がどのように異なるのか考察した。対話的機能の歌と心情表現的機能の歌という概念を用い、哀傷の贈答歌は、全体として心情表現的機能の歌が現れやすいが、非対面の際、特に受け手が遺族の場合に、対話的機能の歌が出現しやすいことが明らかになった。更に、時代的推移を追うことで、哀傷歌がもともとは自己の哀傷を表現し披露するものから始まり、対話的性格を強めていくという過程を論じ、第一部第三章で言及した哀傷の贈答歌の歴史をより具体的に提示した。また、タームとして定着している「贈答」「唱和」といった詠歌形式の枠組みの曖昧さについても指摘した。第四章では、この「贈答」「唱和」を詠歌の実態に即して再考するとともに、平安和歌において見過ごされてきた「和す」という歌の付け方について明らかにした。哀傷歌という切り返さないタイプの贈答の分析から研究を始めることで、和歌のジャンルを超えた普

遍的な歌の在り方の解明に、到達することができた。また、歌の詠み合いの歴史に、人々の集う場と、書簡や伝言という二つの場を示し、対面と非対面の遣り取りの歴史をそれぞれ考えていく重要性を示し、上代の歌の詠み合いから平安の歌の詠み合いへの史的展開モデルの一つを提示する事ができた。

このように第二部では、人と人が心情を交わすための具としての和歌の在り方を実態に即して導き出すことができた。